ダルニー通信

72
2013
冬号

特集

支援対象５カ国の中学未就学・中退の理由

- 全校生徒70名で毎年支援！
  京都の綾部市立河北中学校
- 轡田隆史氏の連載エッセイ 第3回

メコン５ケ国の教育事情　第３回

中学校教育の重要性

一般財団法人 民際センター
理事長　秋　尾　晃　正

日本は戦後、中学校が義務教育化され、中卒は金の卵と言われました。企業は中卒の若年労働者を大量に確保して大量生産が可能になり、今日の日本の経済発展の基礎となりました。現在、日本には大よそ小学校数２万校、中学校数1万校、高校が５千校があります。戦後は財政難でしたが、教育政策・教育行政・カリキュラムを改善して、大きな成果を達成しました。

３～7ページの各国の記事によると、ラオスでは613の小学校に対して51校の中学校、カンボジアは305に対して78、ミャンマーでは1043に対して861となっていて、小学校に比べて明らかに中学校の数が少ないのがわかります。国家の発展を見越しての次世代の人材育成を企てる教育政策を作成する人材が教育省にいない結果だと思います。そのため、国家の発展が阻害されています。こうした中で我々にできることは、遠距離でも通学したい子どもに奨学金と自転車の支援をし、中長期的にはタイのように小学校教師が中学教育を可能にする事例づくりと小学校に付随したクラス・ルームの増設の事例づくりをすることで、そのことにより円滑に中学就学率の向上が実現できると思います。それこそ、海外版金の卵を求めて日本の企業がこれらの国々に進出し、雇用の拡大に繋がると思います。

タイは民際が支援活動を開始した1988年当時、中学への就学率は20％弱でした。中学校の義務化は2010年ですが、世界的に稀にみる速度で中学就学率の向上に成功しました。しかし、学校や生徒は個々に様々な問題を抱えていました。各中学校のダルニー奨学金担当の教員は、日本（＝外国）からの奨学金ということで、奨学生が退学したり、麻薬に手を出したりしないように親身になって指導し、必要なら家庭訪問もしてなんとか卒業させる努力を重ねました。本人も日本からの奨学金の受給者として自覚を強め、卒業していきました。

ダルニー奨学金は、個々の子どもの人生を変えることがあります。同時に奨学金数が多ければ、特例として試験的事例づくりができます。言い換えれば「変化」を創造し、その事例を加速させることで、社会全体が自ら「変容」することを導くことができます。タイではいわゆる小作人の子弟が奨学金を得て中学に行くことで、国全体で中学校への就学を加速させました。いわゆる小作人の農家の子どもが中学に行くことが当たり前になったのです。それが現在、中学就学が当たり前になった第1歩でした。

メコン5国の中学教育の量と質の向上に対して、日本の「民」が支援できる立場にいることの幸せを感じながら、奢ることなく支援を継続することこそ、日本の心ではないでしょうか。20周年の折、タイの農婦がビニール袋に入った真新しい状態の20年前の奨学金証書を私に見せながら、冥途に行く前に奨学金提供者に一度会ってお礼が言いたい。今日あるのも子どもが奨学金をもらったお蔭でこの生活ができると、私に心の底からの言葉をくれました。直接感謝の意を述べる機会がなくても、親のみならず多くの子どもたちの心の中に同じ様な「日本人像」が育まれていると感じます。これこそ「民際」たる真髄だと思います。「国家」の財の支援では民衆の心は響かないでしょう。

ヨー・プラチャヌクロ校

タイ

麻薬に手を出す生徒の増加が心配

パトムターニー県はバンコク北部に隣接し、バンコク大都市圏内に位置づけられています。タイ統計局の2011年度の調査では、平均月収が東北地方の約2.5倍で約12万円です。県の人口は約100万人で、タイ有数の工業団地が進出しています。同県には7つの郡があり、北東にあるノーンスア郡には7つの公立中学校があり、いずれも幼稚園から中学校まで一貫した学校です。

その1つ、ヨー・プラチャヌクロ校の全校生徒は259名で、同校の小学6年生は100%同中学校に就学します。中1の生徒の50%は他校の小学校からで、近隣の70村にある20の小学校から生徒が通います。同校のブーンサーム先生に進級・留年の状況を聞きました。

――小学生の中学への就学率は100%ですか？

ブーンサーム先生「貧困家庭の子も少なくなりませんが、中学校は通学距離内にあり、入学希望者は100%同校に通います」

―― 中学の留年率はどうですか？

ブーンサーム先生「各学年平均で数名いるでしょうか。両親の仕事の多くは農業です。両親の仕事を手伝わなければならない生徒は欠席日数が多くなり、留年します。出席率80 %以下で留年です。もし手伝わなくてすむ場合でも、両親が朝早くから夜遅くまで働いているか、出稼ぎに出てしまっているため、平日も休日も子どもの面倒を見る人が家に誰もいないため、それが非行につながり、麻薬に手を出したり、家出をしたりして中学校の中退につながります」

ブーンサム先生が示してくれた下表の見方は以下のとおりです。まず、12年度に小6だった生徒7名は13年度に全員、同校の中1になりました。また16名が他の小学校から入学しました。さらに3名が前年度中1からの留年生です。12年度中1の23名のうち20名が中2に進級しました。12年度中2の33名は全員中3に進級しました。しかし12年度37名の中3のうち9名が留年したため（卒業は28名）、13年度の中3の生徒数は42名になりました。また、進級・卒業した生徒も全員がすんなり進級・卒業したわけではなく、経済的に苦しい中で卒業した生徒も少なくないはずです。ブーンサーム先生は、麻薬に手を出す中学生が増えていることをとても心配していました。

〈ヨー・プラチャヌクロ校の生徒数〉

	2012年度	2013年度
小6	7（7）	13
中1	23（3）（20）	26
中2	33（33）	20
中3	37（9）※28名は卒業	42
全校生徒数	246	259

→:進級、→:留年

ブーンサーム先生と生徒たち

2014年度タイ・ミャンマーの奨学金の締め切りは3月20日を予定しています。

ミャンマー

親について タイに行ってしまう子も

ヤンゴン地区は東西南北の4つの地区に区分けされています。民際センターが奨学金を提供しているのは、その中の2地区です。その1つ、南地区には、小学校1043校、中学校861校、高校93校があり、生徒数はそれぞれ139,477人、77,103人、23,237人です。

その中から、卒業後にアトゥタウ中学校に通う3つの小学校の中学就学率を下に示しました。同中学校はこの3つの小学校から約2キロの位置にあるため、中学に通う子はほぼ全員がアトゥタウ中学校に通います。

3つの小学校からアトゥタウ中学校の就学率は以下のとおりです。

- キャールカン・テイク小学校：50%
- キャイク・カ・マウト小学校：45%
- タ・ヤール・コーン小学校：45%

これらの3小学校の卒業生は他の中学校に就学する生徒もいるかもしれませんが、ほとんどの生徒は距離の近いアトゥタウ中学に通うので、中学就学率は3校とも50%前後と考えてよいようです。

では、生徒の約半分が中学校に通わない（通えない）理由は何でしょうか？ アトゥタウ中学校のソエ・ミント校長先生に尋ねました。

――中学校に通えない理由は何ですか？

ソエ校長「大きく3つあると思う。①両親の収入が低く、学校に行くのにかかる費用が払えない。②中学生の年齢ならカフェなどで働いて収入を得る機会がある③親が教育の価値を認めていない」

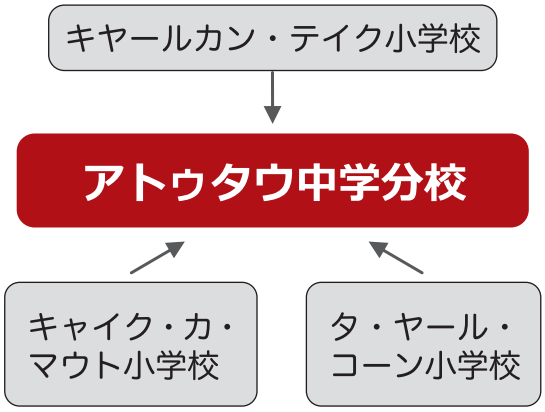
アデュタウ中学校の校舎

アトゥタウ中学校のソエ校長（左）

――中学校をドロップアウトする生徒もいますね。

ソエ校長「私の学校の進級率は下の表のとおりです。学校を中退してしまう生徒の理由も先ほどの3つの理由と似ています。働く機会が近くにあれば、収入を得るために学校をやめてしまいます。学校に行っても、現金収入は得られませんから。中にはタイに出稼ぎに行く親について行ってしまう子もいます」

下表によれば、女子の方が男子より進級率は低く、特に中2から中3への進級で男子70%に対して、女子はわずか30%にすぎません。女子が中学校で勉強を続けていくことが容易ではないことがわかります。



進級学年		中1→2	中2→3	中3→4
割合	男	52%	70%	52%
	女	48%	30%	48%

カンボジア

先生が生徒の卒業を応援する努力をしているけれど・・・

奨学金を提供している3つの県（コンポンチュナン県、カンポット県、タケオ県）の1つ、南部に位置するカンポット県の人口は627,884人で、その92%が農家です。同県には305の小学校がありますが、中学校は78校しかなく、中学校に通うためには長い距離を通学しなければならない村もあります。

同県にあるチュエック・チョウ郡には55の小学校がありますが、中学校は14しかありません（高校はもっと少なくて、3校です）。2012年度の同郡の中学就学率は約78%でした。つまり、2,141名の小学校の卒業生のうち463名が中学校に就学できませんでした。

55の小学校の1つ、ウドム・ミーアンチェイ小学校の全校生徒は353名。2012年度は小5（50名）のうち8%（4名）が、小6（44名）の27%（12名）がそれぞれ中退しました。家が貧しく、働かなければならなかったことが主な原因です。

ウドム・ミーアチャイ小学校から10キロ離れたところにロングチャック・シモーング中学校があります。留年・中退率は5%です。中1修了後が多いようです。同校の副校長先生によれば、その理由は通学距離・低い家庭収入などが原因です。家庭の収入が低い生徒は、親の仕事（農業や漁業）を手伝わなければならず、そのため出席率が低くなり、いつの間にか学校をやめてしまいます。同校では、子どもの将来にとって教育がいかに重要かを親に話して仕事を手伝う時間をなるべく少なくしてもらったり、補習授業を設けたりして、生徒がなんとか卒業できるように努力しています。その一方、教材不足、先生が勉強する機会がないこと（授業の質が改善されない）、先生の給料が低いこと（先生の意欲が増進しない）、校舎の雨漏りなども同校が抱える問題として指摘していました。

ロングチャック・シモーング中学校

ラオス

メコン川に面しているため、タイに出稼ぎ

カムアン県の学区

ラオス中部のカムアン県には613の小学校と51の中学校があり、同県全体の生徒数は小学生が53,480人、中学生が10,021人です。また、同県は右図のとおり10つの郡に分かれ、その1つ、ノンボック郡（12-03）はメコン川沿いにあります（地図では9に分かれていますが、新たにもう1つ追加されました）。メコン川沿いにあるということは、灌漑が容易で二期作、三期作が可能であり、さらにタイへの出稼ぎのチャンスが多くあり、現金収入を得る機会に恵まれていることを意味します。しかし、親が出稼ぎに出て行ったきりで、親子が離れて暮らしている家庭もあります（特に母子家庭では、お母さんがタイに出稼ぎに行ったきりの家庭が多いようです）。

ノンボック郡にはさらに7つの学区があり、ノンボック中学校があるノンボック学区は郡の西北に位置し、メコン川に面しています。同中学校には2キロ以内に

ある4つの小学校の卒業生が通います。その中でドンヤン小学校は半数が別の中学校に通います。

ノンボック中学校の退学率（留年も含む）はどうでしょうか？同校の統計では中1から中2は21%、中2から中3は22%、中3から中4は11%となっています。同校によれば、退学する理由として主に以下の3つを挙げています（留年する生徒は、留年した学年で中退する可能性が高いようです）。

①両親が働きに出るため、子どもに家事（炊事、弟妹の世話、洗たくなど）をさせるため
②中学教育を受けても、その見返りがないと親が考えているため
③タイに出稼ぎに出る親と一緒にタイに行くため

同校の特色として、タイに近いため、毎年、現金収入を求めて山奥からノンボック郡に移動する家族が見られ、その家族の子どもたちがノンボック中学校に転入することです。しかし、そのような家族は田んぼを持たず、安定した収入を得る機会も乏しいため、子どもたちは中学校をやめてしまいがちです。

ノンボック中学校

ベトナム

工場で働くため、中学校をやめる生徒も

奨学金を提供しているドンナイ省の人口は2,665,100人で、同省には1つの市と13の郡があります。人口の65%が1ヘクタール（1万㎡）以下の田んぼでお米等を作って生活しています。田んぼのない農家は7%です。また、貧困世帯（世帯収入が農村部では月18ドル以下の家庭。ちなみに都市部では月25ドル以下の家庭）は19.43%です。

ドンナイ省のディンクワン郡には、小学校31校、中学校16校、高校5校が設置され、生徒数はそれぞれ18,724人、13,977人、6,695人です。同郡から以下の4つの中学校を選び、近隣の小学校からその4つの中学校に就学する率を示すデータをベトナム事務所に求めたところ、信頼できる公式データがないとのことでしたが、実情に詳しい者（複数）に尋ねたところ、中学への就学は4人に3人ぐらいの割合とのことでした。一方、各中学校の中退率（2011年度）は右ページのとおりです。

タイソン中学校の生徒たち

生徒が中退する理由について、各校の先生に尋ねたところ、概ね以下の3つのいずれかでした。

①経済的理由（家族に十分な収入がない）。
②学校までに距離が遠くて通いきれない（自転車がなければ、20キロを歩いて通うケースもあります）。
③戦争の後遺症で身体に障がいがあり、学校に通い続けることができない。

ドンナイ省はホーチミン市と隣接していますが、工場の建設が市郊外からさらに農村部まで広がり、労働者に対する需要が増えています。そのため、家庭の経済事情が悪く、体の大きい生徒は年齢を偽って工場で働くため、学校をやめてしまうケースも、少ないながら

見られます。上記4つの学校の先生は、生徒が中退しない方法として、学費を下げたり、自転車を提供したり、先生を派遣したりする方法が有効ではないかと指摘していますが、それを実現するのは簡単ではないようです。

中学校名	中退者数／全校生徒数
タンソン中学校	33人／933人
タイソン中学校	22人／651人
ングイエン・トライ中学校	20人／732人
イグイエン・ティニ中学校	26人／950人

ングイエン・トライ中学校

よろしくお願い致します!!

海外に住む日本人に民際ホームページをご紹介ください

世界のどこに住んでいても、民際センターのホームページ http://www.minsai.org（日本語）からクレジットカードで教育支援ができます。英語の場合は http://www.edfthai.org です。海外に住む日本人がメコン5ヶ国の経済的に恵まれない子どもを教育支援していることが分かれば、現地の友人から尊敬され、日本人のイメージアップにつながると思います。

NEW!

書き損じハガキ・外国紙幣を送ってください！

書き損じハガキや未使用切手・テレカ、古本などを集めて民際センターの事務所までお送りください。また今回新たな取り組みで、外国紙幣も収集することになりました（銀行で換金できるものに限る）！小額でも結構です！封筒に入れて事務局まで送ってください。換金後、奨学金など現地支援に活用させていただきます。

送り先：〒162-0801　東京都新宿区山吹町337　江戸川橋東誠ビル5F
一般財団法人 民際センター

轡田隆史のエッセイ③

スシの歴史は回る

このごろの子どもたちは、おスシはグルグル回って自分の前にやって来るもの、と思いこんでいるらしいぞ！

古典的なスシ屋で育ってきた、ぼくら老人たちは、昨今の「回転スシ育ち」を嘆きますが、なあに、そういう老人たちだって、じゃあ、おスシの歴史を教えてよ、と子どもたちに質問されると、ウームとうなって答えられない。

カンボジアの真ん中にドカーンと広がるトンレサップ湖あたりが、スシ発祥の地らしいといわれると、みんなビックリします。

雨が多くて気温が高い、高温多湿のアジア・モンスーン地帯は、「米と魚の文化」地帯です。トンレサップ湖も乾期には小さくなりますが、雨期になるとメコン川が逆流して大きくふくれあがります。たくさんの魚も流れこんでくる。

このあたりに限らずベトナム南部なども同じですが、水たまりがありさえすれば魚がいる、というくらい生命力にあふれているのです。

そういう豊富な魚を保存するために大昔に発明されたのが、魚を塩と米に漬けこんで発酵させる方法です。米はドロリとなってすごいニオイを出し、魚はすっぱく変化して保存がききます。

この技法は稲作といっしょに北上して、紀元前の時代に中国や日本列島に伝わったらしい。いま日本ではそれをナレズシと呼んでいます。琵琶湖のフナを用いたフナズシが、その代表でしょう。アユでも作ります。すっぱくて、うまい！

やがて、炊いたコメにお酢を混ぜて、魚をのせて食べる、いま皆さんが食べているようなスシが生まれます。ナレズシと姿も違い、ニオイもほとんどなくなりますが、スッパイというところは同じですね。江戸時代に、いまのように魚と、酢を混ぜたご飯（シャリ）を手で握った「握りずし」が誕生します。

いまや握りずしは、回転式、古典式を問わず世界的な食べ物になりました。歴史を回してくれたカンボジアの皆さんに感謝しながら食べたいものですね。

轡田（くつわだ）隆史 氏

1936年東京生まれ。元朝日新聞論説委員。欧米・東南アジア・中国・中東などを歴訪。
元・テレビ解説者。NHK/FMラジオ「日曜喫茶室」に出演中。
日本記者クラブ、日本ペンクラブ、日本エッセイスト・クラブに所属。
著書に『「考える力」をつける本』など。

※ 轡田氏のエッセイ連載は1年間（4回）を予定しています。

書き損じはがき支援校の紹介

全校生徒70名。1995年からずっと支援

京都・綾部市立何北中学校

奨学生の証書と写真を手にする
同校生徒会のメンバー

京都府綾部市立何北中学校がダルニー奨学金を支援し始めたのは1995年。もともと様々なボランティア活動をしていましたが、他校が取り組んでいないボランティア活動で、しかも同じ中学生を助けられるということで、ダルニー奨学生の支援活動を始めました。以後、現在まで19年間、延べ118名（タイ70名、ラオス45名、カンボジア3名）の生徒に奨学金を提供してきました。これだけ長く支援活動を続けられる秘密は「この活動が本校の特色だという気持ちが生徒会に浸透しているから」と担当の森先生。少子化や過疎化で現在、全校生徒数は現在70名ですが、はがき収集箱を校内数箇所に置くだけではなく、地域社会とも連携して郵便局や農協の事務所にも設置しています。70名でもこれだけ集められるのは、生徒にも地域にも書き損じはがき収集による支援活動が浸透しているから。「今回は××名分集まった。もう少し集めればよかったなあ」などと生徒同士が話しているそうです。何北中学の生徒は支援している奨学生を身近に感じることで、国際的視野を広げているのではないでしょうか。

今年度から支援を始めた理由を
阿部信一郎校長に聞く

なぜ、中学校で国際協力を行うのか？
なぜ、ダルニー奨学金なのか？

東京・八王子市立鑓水中学校

― 鑓水中学校はJICAやNGOの職員らを呼んで、しばしば発展途上国についての講演を行っていますね。

阿部：本校は特色ある学校づくりの一環として、「国際理解教育」のテーマで八王子市の研究指定校として研究活動を行っています。現在は2～３ヵ月に1回の割合で国際協力の分野で活躍する方々を招へいして講演をお願いしています。

― なぜ、国際理解教育のテーマを設定したのですか？

阿部：世界には、どのような家庭に生まれたかで自分の人生が決定づけられてしまう、「生まれながらの不平等」が当たり前になっている国が少なくありません。日本は努力さえすれば自分の人生を切り開くチャンスのある国です。しかし、生徒たちは自分の恵まれた環境を知らずにいます。そこで、海外、特に発展途上国からの留学生やNGOの方に来て話をしてもらい、生徒たちがいかに恵まれた環境にいるかをまず認識してもらいたいと思っています。

― ダルニー奨学金を支援することで、学校にどんなメリットがあるのでしょうか？

阿部：どの学校にも日常の営みがあります。授業を受けて、昼食を食べて、グランドで運動して・・・。しかし、これだけでは「あの学校に学べて良かった」という意義を生徒は持ちにくいと思います。この自分の学校に来たからには、他の学校では学べなかったことが学べたといえる裏の教育課程、オリジナリティを創るのが校長の役目だと思っています。先生も生徒も前任者や先輩達がやってきたことを繰り返すマンネリではなく、自らの頭で考えて新しいことに挑戦する姿勢で取り組む教育課程が必要です。

世界は「違い」に満ちています。「違い」を「違い」として認める人間的成長のないところにいじめ問題も発生してきます。本校の生徒たちはすでに２回、民際センターの冨田部長さんのご講演を聴き、日本と東南アジアとでは教育事情にこんなにも大きな「違い」があることを学びました。自国文化の再確認と学習意欲の喚起が見られたと思います。また、ダルニー募金は、募金したら終わりではなく、どんな子を支援しているのか、支援している国がどんな状態なのかを生徒たちが更に学べるシステムになっています。支援を通じて、日本と対象国の「違い」を理解し、自分たちの恵まれた環境をまず認識する。そして、努力すれば人生を切り開ける日本という国で学校に通っているのだから、今のこの時間を大切にして人生を切り開いていってほしいですね。

ラオス訪問で繋がれた太い糸

大学で教科書を販売してラオスの子どもたちを支援をしているStudy for Two（本誌68号9ページ参照）中央大学支部のメンバー7名が支援している奨学生に会いにラオスに行きました。以下はメンバーの1人、甲斐正隆さんの感想文の抜粋です。

いよいよ学校訪問の日、車から降りると、満面の笑みで子供たちは待っていてくれた。「サーバイディー」（ラオス語で「こんにちは」）と。綺麗に列を作ってくれて、花束を持って私たちを迎えてくれた。彼らが持っている花束よりも数倍輝いて見える彼らの笑顔が素敵で、私は胸が熱くなると同時に、溢れんばかりの笑顔で慣れない言葉で「コープチャイ」（ラオス語で「ありがとう」）と答えた。その後授業を見学させてもらった。決して良い環境とは言えない中で、懸命に勉強する姿に自分も負けてられないなと感じた。

１校目、２校目と子供たちと、サッカーやバレー、長縄、折り紙などで遊んだが、彼らの笑顔が素敵すぎて、今でも撮った写真を見返しながら元気をもらっている。帰り際に「かい、かい」と自分の名前を呼んでくれた時は帰りたくないなーって切実に思った。

ラオスに行った感想を求められたなら、心の底から「行って良かった」というだろう。私は今Study for Twoの活動を通して彼らに関われている。私たちとラオスの子どもたちは太い糸でつながれている。絶対に離してはいけない。私は来年も彼らに会いに行きたいし、今後ずっと彼らに関わり続けていきたい。そう思わせてくれたのは、彼らと手を繋いで感じたことだし、どんなものよりも私に力をくれる彼らの笑顔があるからだ・・・。

続いています バレーボール贈呈の旅

畑寛和

今年も（2013年8月5日～13日）タイ東北地方を駆け巡ってきました。12年目を迎えたイサーン訪問ですが、最近3年間は奨学生訪問の旅に、バレーボール教室とボール贈呈の旅が加わっています。日本のバレーボーラーから、自チームが使っているボールを贈る活動です。

まずはロイエット県の小学校から。この小学校は同県大会で優勝するほどのチームです。全校生徒は約60名ですが、学校の方針で全員がバレーボール部員。ほとんどの子どもが裸足かゴムサンダルでジャンプして、スパイクを打ちます。靴を履いている子はほとんどいません。非常に身のこなしが鋭く、なかなかの技量！でした。

この学校のボール購入年間予算は3個。私が持ち込んだのは60個。ボールは全校生徒に行き渡りました。校長先生は驚き、生徒たちと一緒に喜んでくれました。

その後は隣の郡、そしてサコーンナコン県、さらにナコーンパノム県、チャンタブリ県へと移動して、各地に小中学校にボールを贈呈しました。今年の贈呈数は約400個です。

2010年に提唱した「バレーボール1000個プロジェクト」を、静岡市バレーボール協会のメンバーが後押ししてくれました。その後、日本全国のバレーボーラーが協力を申し出てくらました。そして、いつの間にか1000個を遥かに超え、今年までの累計は約2800個。富士山の高さをもじって「3776個」を新たな目標としましたが、来年度に達成しそうな勢いです。

民際センターがエッセイコンテストを行います

民際センターでは、オリジナルの日本語エッセイを募集しています。応募内容は以下のとおりです。

●**テーマ**：次の３つのジャンルから選択。①「タイ・カンボジア・ラオス・ベトナム・ミャンマーと私」１ヶ国を選択し、旅行で感じたことや、訪れたことはなくてもその国に馳せる思いなど、②教育（国内、国外を問わず）、③国際支援（国を問わず）。複数ジャンル応募不可。

●**応募方法**：郵送かメールで応募。400字詰原稿用紙3～10枚。Microsoft Word、ワープロ原稿はA4判用紙に40字×30行で印字。原稿用紙への印字不可。いずれも縦書き。表紙にタイトル、氏名（ふりがな）、住所、生年月日、性別、電話番号、メールアドレス（あれば）、400字詰原稿用紙換算枚数、過去を含めた民際センター支援の有無（支援の有無は作品評価と無関係）、民際センターからのニュースレター（①ダルニー通信、②不定期のメールニュース）の送付希望有無を明記。表紙と原稿コピーをあわせ、右上を綴じる。メール応募の場合は件名を「民際エッセイコンテスト応募」とし、郵送の場合は表紙と原稿を添付。

●**資格**：20歳以上の日本国内在住者

●**賞**：阿刀田高賞１編＝図書カード5万円分、民際賞10編＝図書カード5千円分、協賛企業賞＝資生堂賞、ハウス食品賞

●**締切**：2014年2月28日（必着）

●**発表**：7月31日、入賞者に通知

●**主催**：民際センター

●**選考委員**：阿刀田高、神山典士

●**参考**：入賞作品はウェブサイトに掲載

●**諸権利**：入賞作品の著作権は主催者に帰属。

●**応募先**：民際センター「エッセイコンテスト」係まで。

皆様のご応募をお待ちしています！

事務局活用リスト

事務局ではさまざまな資料やサービスを用意して、ドナーの皆様のお問い合わせやご要望にお応えしています。
※ご利用につきましては、以下の要領でご連絡願います。

地域で奨学金や図書セットを広める活動をしたい

① 書き損じハガキ・未使用テレカの収集
② 使用済みインクカートリッジの収集
③ パンフレットまたはリーフレットの設置
④ 不要な本を集めてブックオフに送る
⑤ 募金箱を設置したい

お気軽にお電話またはメールでお問い合わせください。折り返し資料などをお送りします。また、ホームページでも紹介しておりますので是非ご覧ください。

奨学生や現地のビデオを見たい

DVDは現地情報満載の広報ビデオ(13分)。パネルを貸し出すこともができます。送料は負担願います。

個人でタイを訪問し、奨学生に会いたい

80円切手を貼った返信用の封筒をお送りください(メール可)。折り返し、資料をお送りします（3～5月と10月、学校はお休みのため訪問できません)。

タイの奨学生と文通したい

① 手紙の翻訳
② タイの切手購入

①：タイ語→日本語に翻訳します。手紙の原本と80円切手4枚を同封して送ってください。
②：タイ切手セット（12回分1000円）の代金は郵便定額小為替か現金でお願いします。
80円切手を貼った返信用の封筒も同封してください。
※奨学生の氏名をカタカナで読みたい方は、電話、メール、ファックスでお問い合わせ下さい。

民際事務局でボランティアをしたい

PC入力、DTP経験者、事務作業など。電話またはメールで担当、関口までお問い合わせください。

奨学金の説明を聞きたい

事務局では随時無料説明会を行っています。参加希望の方は必ずご予約ください。

毎年忘れずに送金したい

お申し込みいただければ、銀行自動引落申込書をご送付いたします。

編集後記

前号5ページに掲載した「日本兵に母を殺された祖父」の記事で、ベトナム事務局の職員がグェンさんを何度も訪問したことが書かれていました。この職員はベトナム事務局長のヴァンです（ダルニー通信66号3ページ参照)。ヴァンは小さい頃、義理の叔父さんにとても可愛がってもらいました。しかし、彼女が日本人と結婚すると聞いて結婚式に出ないだけではなく、それ以来、縁を切られてしまいました。義理の叔父さんも小さい頃、目の前で両親が日本兵に殺されたためです。今回、グェンさんを義理の叔父に見立てたのでしょうか、ヴァンは「日本人の親切・優しさを証明したくて」片道4時間のグェンさんの家に6度も足を運び、説得しました（「自分の問題だから」とバス代やレンタカー代は自腹で)。NGOは様々な領域で草の根の交流・支援による平和な世界の実現を目指しています。皆さんのご支援とヴァンの粘り強い説得でグェンさんの態度が変化し、草の根レベルで日本とベトナムの友好がさらに一歩前に進みました。（冨）

一般財団法人
民際センター

ダルニー通信　第７２号　　２０１３年１２月１日発行　　発行人：秋尾晃正
一般財団法人民際センター　〒162-0801 東京都新宿区山吹町337 江戸川橋東誠ビル5F
TEL ： 03-6457-5782　　FAX ： 03-6457-5783
Eメール：info@minsai.org　　ホームページ：http://www.minsai.org/
振替口座：００１５０－０－５７６６４　（奨学金専用口座）
表紙：ラオス

―紙面レイアウト協力―
吉田シャショク　福岡県大牟田市小浜町1-5-17　☎944-51-8604

2013年進学した8期生達

コーンケーン大学

SPOT LIGHT

ラオス人教師修士留学事業

Teacher Training at Master's Degree Level(TTM事業)

この事業はラオス人の優秀な教師を選抜して、彼らがタイの名門コーンケーン大学で教育学の修士課程を勉強できるようにサポートします。学校教育は子どもが未来を切り開く上で欠かすことのできないものですが、その学校教育で教師の質が低い場合は、どうしたらそれを効率よく改善できるでしょうか？
ラオスでは教師数の不足のため、高校を卒業していない人が教師として小学校で教えていることがあります。教授法の知識も、授業の準備に参考として使える良い教師用指導書もない中、生徒たちに質の高い教育を提供するのは難しいでしょう。

TTM事業は2004年に始まり、これまでに20人の卒業生を輩出しました。 3年間の勉強を終え修士号を取得した教師たちはラオスに戻り、教員教育、教師用指導書の開発など、ラオスの教育の発展に励むことになります。

TTMの成果

卒業生のうち、1人はラオス国立教育科学研究所の教科書編纂部に配属され、教科書作成に携わっています。他の１人はタイの別の大学で博士号を取得し現在、ラオスの大学の教育学部で次世代の数学教師の育成に携わっています。このように、卒業生たちはラオス教育の教育内容充実の核に成長し始めています。弊団体は奨学金などの事業で多くの子どもたちが基礎教育を受けられる「量」の拡大を図る一方で、TTMで「質」の充実を図っています。

授業の様子

ＴＴＭ事業のご寄付について

TTM事業の詳細やお申し込みはinfo@minsai.orgや03-6457-5782(担当：志賀だうる）にご連絡ください。